

平成30年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第58巻2月号(通巻703号)

風土



2

鮫 鯨 鍋 妻 子 ら 遠 く し た り け り

（句集『竹取』より昭和四十三年作）

この年の桂郎師は、木曾路への旅や長良川鵜飼いを見に行ったり、芭蕉の足跡をたどり郡上八幡へ出向いたりしています。健康に不安を残しながら妻子とゆっくり過ごすことが少なかったようです。この「鮫鯨鍋」も旅先でのものでしょう。「遠くしたりけり」には単なる距離だけでなく、妻子と話を交わすことができぬ心情も垣間見られます。

冬 椿 生 菓 子 の ご と し 波 郷 病 む

（句集『竹取』より昭和四十三年作）

波郷は戦後、胸部疾患のため終生療養生活を余儀なくされました。この句はまた入院した桂郎師の師の波郷を詠んだものです。波郷は次の年の十一月に亡くなっていますので、桂郎師のこの時の心情には並々ならぬものがあったと推測されます。しかし「冬椿」を「生菓子」に喩え、波郷の病と取り合わせるとは驚きます。椿好きの波郷を想い起すどこかで、「生菓子」と結びつけたのかもしれない。

今生に白は紛れず冬かもめ

(句集『心後』より平成二年作)

俳人協会刊行の『神蔵器集』の自註に拠りますと伊東温泉に泊まり、相模灘の鷗の声に目覚め鷗の白が目沁みたとあります。冬青空を舞う真白な鷗は、空にも海にも染まることなくただまぶしいだけです。その「白」に、この世のどこにも紛れることのない神々しさを感じたのです。器師にとって「白」は特別で、例えば「たまきはる白のひびけり貴椿」のように、命の根幹に触れるものの色として捉えられています。

冬に入るすでに遊行の大櫓

(句集『心後』より平成三年作)

「遊行」とはぶらぶら歩くことが語源ですが、ここは僧が修行や説法のため諸国をめぐることを指します。歴史的には遊行上人の全国行脚が有名です。器師は「大櫓」の姿にそれを見ているのです。「冬に入る」ですので「大櫓」はすでに葉を落し冬空に泰然と立っています。その枝先が大空にけぶり、ゆらぐ姿を「すでに遊行」をはじめたと感受したのです。

ひたすらに

南うみを

芋の露ふるへだしたる太鼓かな

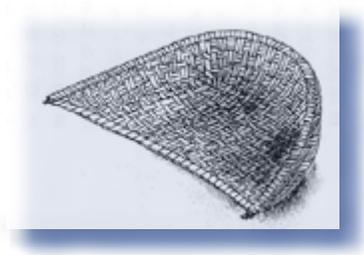
蜻蛉発つ翅の白露うちほらひ

桂郎へ供へしくわりんすぐ傾ぐ

初鴨のひとつひとつと日に消ゆる

むつくりと噴いてまんじゆさげの冬葉

畝つくる尻を笹子の囃すなり
花八手歩くは蠅のたぐひなる
閉ぢし翅重なりあはず冬の蝶
すさまじや幹に食ひ入る鋼の輪
寒禽の声きらきらと水面刺す
ひたすらに吹かれて冬の鷺となる
木の葉降るたびおほぞらの色うすれ



竹間集

同人作品



冬 薔 薇

宮川みね子

漱石忌波が消しゆく波の跡
冬あたたか書架にあふるる句集かな
冬薔薇ひらがな書きのごとき雨
藍染の卓クロス買ふ一葉忌
遠山の晴間みじかし羽子板市
去年今年灯を煌々と仏間かな
夕空は真水のごとし冬薔薇

雪ばんば

浜 福恵

柿甘し夕おだやかに与謝の空
浜に建つ一の鳥居や磯千鳥
軒に乾く葉草の香や神迎
神迎ふ若狭七浦波立ちて
兎追ひしふるさとの山父の声
はらからと明日は離郷の葛湯かな
喪中はがきを届けて行きぬ雪ばんば

酉 の 市

門 伝 史 会

酉の市老舗がビルとなりぬたり
馬場大門櫂並木や冬めけり
そちこちに手締めの起こる大熊手
夜の帷降りるを待ちて宮神楽
文化の日再入場の美術館
庭園に風韻をきく石路の花
綿虫飛ぶ今がしあわせかも知れぬ

十一月

鈴木石花

水琴の音確かなる星月夜
矢筈薄諸手に囲ひ括りけり
秋深き新譜の暗唱繰り返す
大声の発声練習神の留守
波郷桂郎くらはを偲ぶ十一月
ケアハウス入り口の畑大根引く
合掌す納豆汁ある朝餉の膳

小春日

山田暢子

立冬や午前も午後も静かな日
穏やかな齡八十路の小春かな
ひとり言ばかりの暮らし大根煮る
ペランダに不要となりし漬菜石
遺されて広くなりけり冬座敷
悴んで青き文字書くポールペン
「外套の重きは捨てよ」子に言はる

神迎へ

岩木茂

生き生きと真水働く台風禍
桂郎のまはりの十一月の句碑
三日月の切つ先赤き憂国忌
流木に燃え移りたる浜焚火
神迎へ千年榧が日にとどき
冬蝶の上る百八段の磴
虎河豚の斑にある冬の日本海

桂郎忌

小林輝子

祖母がゐるやも霧深き狭間畑
かしこまりたくなる菊の名前かな
咲き誇るもつてのほかの地に垂るる
薄雲のかかりて紫苑日和かな
十三夜めがねの指紋拭き仰ぐ
姥月や母亡きあとの父思ふ
新宿のいよよ遠のく桂郎忌

山河集

同人作品



南うみを選

樹から樹へ竹へ夕日のからすうり

落合 絹代

柀目出る夫の代筆神の旅
やうやくに喪のなき年や賀状書く

鎌倉五山抱く背山の眠りけり
よき寺のよき梵妻や石路の花

白鳥の水面に朱を憚らず

山田 健太

人形にときをり菊師語りかけ
もののふの草履に湿り菊花展

馬の舌水草紅葉揺らしをり
蒼穹や枯野の肉を板で売る

新松子落として風の強き郷

上辻 蒼人

雨ぐせの付きたる郷の冬紅葉
枇杷の花はにかむやうに咲きにけり

黒皮茸並べ干したる新聞紙

正倉院展

瑠璃杯は西域の色秋の色

藤の実やみちのくにある父の里

水井千鶴子

木の実落つ一二三四あとは風
新酒汲むわが誕生日八十路かな

晩秋の山路を急ぐ帰り道
一葉忌柱の傷の想ひ出も

雲かけて甲斐の山並み神迎へ

布施まこと

マリア像細身に停てり小鳥来る
うそ寒や首のうしろを掴まるる

母と子の袖引き合うて七五三
釈迦堂をほつほつ濡らす初時雨

風土独語／南 うみを



樹から樹へ竹へ夕日のからすうり

落合 絹代

「樹から樹へ竹へ」のリズムと「竹へ」の場面転換がまことに巧みです。「からすうり」の蔓の走りが手に取るように解り、樹と竹の緑と夕日とからすうりの赤のコントラストも見事です。

一番に氏神 囲ふうつた姫

森屋 慶基

「うつた姫」は四季の冬を守る神です。「うつ田姫」とも書きますので、農に関わるのかもしれない。一番先にうぶすなを守る神社の囲いをして「うつた姫」に守って貰うのです。「うつた姫」と置くことで、厳しい冬がやわらぎそうです。

蒼穹や 枯野の肉を板で売る

山田 健太

この句は「枯野の肉」で読み手の想像力を試しています。「枯野の肉」とは枯野で獲れる獣や鳥の肉です。それを「板で売る」のですから、さつき仕留めたばかりの温みのある生肉を、その場で売っているような臨場感があります。野生味があります。

秋群の騒々しきまでに 枯るる

谷田明日香

葉を落とした秋の群れの雑然とした在り様を「騒々しきまでに」表現しました。この句は作者が描くのではなく、読み手に想像させることで完成します。枯秋群が活写されました。

黒皮茸 並べ干したる 新聞紙

上辻 蒼人

「黒皮茸」は奈良の宇陀や吉野で採れる茸で、味は椎茸に似て

松茸の傘ぐらゐの大きさがありません。量的に少ないので市場に出ることも少なく、昔から現地で食されている。収穫した「黒皮茸」を「新聞紙」で干すところにその土地柄が出ています。

高張りの五百をくぐり西の市

森田 節子

「西の市」は東京の鷲神社が有名で、開運・商売繁盛を願い、数十万の人々が押しかけます。参道には縁起物を売る露店が延々と続きます。その賑わいを「高張りの五百をくぐり」と置きました。皓皓とした提灯の下をどこまでも潜っていくのです。

木の実落つ 一二三四あとは風

水井千鶴子

この句、「一二三四」から「あとは風」と転換することで、木の実の落ちる様子を細かに表現しました。風が吹いて一つ二つ三つと落ちる音がしたかと思うと、ばらばらばらと数えきれぬほど落ちだしたのです。その変化を「あとは風」で押えたのです。

迫り上がるからくり時計冬の星

奥田 茶々

この「からくり時計」はからくり人形がせり上がり時刻を知らせるものです。オリオンかスバルか、冷たくぴんと張りつめた星空に、時代がかった「からくり時計」が鳴ります。悠久の時を感じさせる句です。

うそ寒や首のうしろを掴まるる

布施まさ子

「うそ寒」は晩秋の「少し感じるほどの寒さ」を言いますが、多分に心理的な気分を含んでいます。この句も「首のうしろ」に「うそ寒」を感じたのですが、同時に誰かに「首のうしろ」を直接掴まれたような恐さを覚えたのです。(以下略)

風土集



南うみを選

づかづかと戸口に立てり冬將軍 横手 森屋 麿

黙考の父の晩年葛湯吹く

一番に氏神困ふうつた姫

盆栽の納屋に混み合ふ雪仕度

病院に妻を眠らす時雨かな

大空へ直ぐなるものを冬芽てふ 舞鶴

つぎつぎに尾羽突き上げ鴨餌時

機音にときをり応へ浮寝鳥

萩群の騒々しきまでに枯るる

秋出水過ぎし砂地に蹄跡

どんぐりに袂ふくらむ宮参り 川崎

風邪の子に刻かけて読む絵本かな

高張りの五百をくぐり西の市

ますらをの横抱きにして大熊手

武蔵野の櫂の闇へ神楽笛

谷田明日香

森田 節子

迫り上がるからくり時計冬の星 東京 奥田 茶々

小春日の下駄音かるき湯屋の町

「神の湯」の壁画砥部焼冬ぬくし

冬霧に抱かる瀬戸の島幾つ

木の実拾ふ児等のポケットきりも無し

湧き出しか今綿虫のど真ん中 大和

仏像展混みて静かや小六月

古書街の茶人と覚ゆ懐手

ギプスとれ一つ山越す神無月

リハビリの書き込み増ゆる十二月

神の旅運河に繋ぐ舟のなく 横浜

綿虫のあなたや山容やさしかり

父の忌の綿虫なれば払ひ得ず

鷹の空仰ぎしのみわけふ惜しむ

一片の詩欲しき日の落葉籠

赤石 梨花

落合 絹代